

鹿児島県の映画環境

斉藤 悦則

シネコンの限界

映画をアミューズメント（娯楽）の道具とみなし、その集客能力に期待して、鹿児島県でも映画館で「中心市街地」を活性化しようという企てがある。天文館にシネコンをつくる動きである。

経験的にいえば、シネコンそれ自体は新しい映画愛好者を生み出さず、観客数を増大させるものではない。じっさい全国的には、シネコン増設の動きがとまり、逆に倒産や撤退があいついでいる。鹿児島市内にシネコンはすでに2館あるから、シネコンの新設はいわゆる「パイの奪い合い」を引き起こすのみであろう。これが大方の意見である。

しかし、予算規模20数億円の事業は、なぜかとてもありがたみのあるものらしく、鹿児島市も鹿児島商工会議所も天文館シネコン建設について、全面支援の構えをくずさない。余計なことながら、われわれは、佐賀市の中心商店街が立体駐車場をつくって、その借金が返せずに「破産」したケースを思い起す。（注：2008年5月末、佐賀市の中心部にある呉服町名店街協同組合は佐賀地裁に自己破産を申し立てた。県の融資を受けて建設した立体駐車場は利用者が少なく、県からの融資額4億円のうち約3億8800万円が返済できなくなっていたからである。駐車場があれば客が来るという期待は外れ、車の利用者は郊外大型店に集まった）

スクリーン数に関して、九州内で鹿児島は下位にあるとはいえ、福岡・熊本を除く他県より著しく劣っているわけではない（注：県ごとのスクリーン総数を多い順に並べると、福岡 160、熊本 53、長崎 30、大分 28、佐賀 27、鹿児島 24、宮崎 18、ちなみに沖縄 33）。しかし、他県にあって鹿児島にないものが二つある。ひとつは毎年開催される映画祭、もうひとつがミニシアターである。

なぜ鹿児島県にはミニシアターがないのか？ 逆にいえば、なぜ他県ではミニシアターが成り立ちうるのか？ その事情を調べてみたい。

文化装置としての映画館

日本で公開される映画は毎年およそ800本。最近では邦画が洋画を上回ってきたが、比率はほぼ五分五分。すなわち、邦画は毎年400本が公開されているが、インディペンデント系の邦画（映画館で上映されず、映画祭などのイベントでのみ上映されるような映画）もほぼ同数あると見られる。観客数は増えていないが、映画をつくりたがる人、映像文化に興味のある人の数は増えているようである。

さて、鹿児島で観ることのできる映画の本数は、東京に比べるとその4分の1にすぎない。シネコン2館（計20スクリーン）を備えているとはいえ、両館のプログラムはほぼ同一で、しかも観客動員能力が高そうな（すなわち俗受けしそうな）作品しか上映されない。

シネコンの性格上、よほど話題性が高くないかぎり、作家性の強い作品や、おもしろさが分かりにくい作品は上映されない。

書店にたとえるならば、ここはマンガ・週刊誌など軽い読み物や実用書しか置かず、文学や哲学の本をそろえていないようなものである。そういう本屋しかない町は、都市機能を十全に果たせない。そこに住めば知性や感性を深める機会に恵まれるのが、都会生活のメリットである。映画館の存在もその重要な一つである。だからこそ、鹿児島以外の他県では、少なくとも県都に一軒、いわゆる名画座がある。

ミニシアターがなければ、ひとびとは世界の「名画」に接することができない。たしかにレンタルビデオショップには、とても全部は観きれないほど沢山の作品が並ぶ。しかし、レンタル屋の品揃えは当地で公開された作品を柱とするらしく、営業的な観点からすれば、当地で話題にもならなかった作品は積極的に揃えられるはずもない。つまり、レンタル屋での品揃えも、当地の「民度」すなわち「文化レベル」を反映する。

また、そもそも映画は映画館で鑑賞すべきものである。映画館に「わざわざ」足を運ぶこと、映画館の「暗がり」のなかで映画を観ること、映画を観ながら他の観客と感情を同調させること、こうしたことが映画鑑賞に「ハレ」の気分を付与する。すなわち、その映画を観たことが記憶に刻まれる。その時代を生きたことが後で思い出される。

まさしく、良い映画を映画館で観ることが人生を豊かにするのである。

映画文化の貧困県

最近シネコンですら経営が厳しいようだが、ミニシアターならなおさらだ。映画館があるから人が来る時代ではない。シネコンはアミューズメントを強調して集客に血道を上げるが、ミニシアターはほとんど教育機関と同様に、観客を育てながら、来場者を増やさねばならない。ミニシアターの設立・存続には、採算の度外視、赤字経営を覚悟しなければならない。じっさい、全国どこのミニシアターも、経営はきわめて良質のボランティア活動に等しい。理念に殉じて苦難に耐える、という姿があちこちで見られる。平たく言えば、映画好きが高じてがんばっているバカモノがどこにもいるのである。

文化行政が「進んでいる」自治体は、そうした映画好きをサポートし、ミニシアターを箱物として提供している。有名どころでは、神奈川県川崎市の川崎アートセンター、兵庫県神戸市の神戸アートビレッジセンターなどがある。

ミニシアターがない地域では、映画の自主上映会が開かれる。鹿児島県民はその点でも苦勞を強いられる。フィルム上映のための映写機を備えた施設が皆無(!)だからである。こういう劣悪な環境は、九州では鹿児島県でしか見られない。(注：これは全国公立文化施設協会が公表している「35ミリ映写機所有会員施設一覧」による)

したがって、鹿児島で映画の自主上映会を開くためには、映写機を(しばしば他県の業者から)レンタルしなければならない。そのさい映写技師も随伴するので、費用は余計にかさむ。

鹿児島の問題は映写機にとどまらない。スクリーンも劣悪である。とくに鹿児島県歴史資料館(黎明館)の講堂のスクリーンは、歪みが著しく、画面が波打つ。鹿児島県民交流センターは大ホールも中ホールもスクリーンは小さい。

また、公立の施設は夕方以降の利用が難しいなどの問題もある。禁煙や非常口などの照明が上映中にも消えず（消してもらえず）、さらに客席間の通路照明も無用に明るく、映画鑑賞の妨げになっている施設もある。

こうした劣悪さを見れば、鹿児島県にミニシアターが存在しないことと、鹿児島県で映画祭が開催されないことが、根の部分ではつながっていると理解できる。

鹿児島県コミュニティシネマ

2006年の暮れ、「シネシティ文化」および「鹿児島県東宝」が閉館し、鹿児島県中心部の天文館商店街から映画館の灯が消えた。もともとマイナー系の映画はなかなか観ることのできない鹿児島県市ではあるが、多少とも名画座の匂いを残していた「シネシティ文化」の閉館は鹿児島県の映画愛好者にとって痛かった。

そこで、名画の自主上映を企てる会が発足する。しばらくの準備期間を経て、2007年6月16日、「鹿児島県コミュニティシネマ」が正式に誕生した。

この会の趣旨は以下のとおり。

鹿児島県における豊かな映画環境を創造することをめざし、地域に根ざした上映活動や、より映画を楽しむために関連する事業を継続的に行う。

1. いろいろな映画が観られる街にする
2. 映画について学ぶ機会をつくる
3. 情報発信する（機関紙・ホームページ）
4. 他団体の上映活動等を支援する
5. 活動の理解者を増やす
6. その他関連する活動をする

この会はその趣旨に沿って、1～2ヶ月に1回、上映会を催している。同時に、ミニシアターの設立を狙って、勉強会を重ねている。

しかし、後で述べる他県の事情からも明らかのように、ミニシアターを実現させ、存続させるのは、こうした組織体の活動によってではなく、一人の映画バカの、自己犠牲的な努力によってである。そして、鹿児島県にはこうした映画バカがいない。「なこよかひつとべ」の精神は消えた。

このことは、いま計画されている天文館シネコンにも深刻な影響をおよぼすであろう。すなわち、天文館シネコンを推進する集団には、映画バカはいなさそうであり、そこに映画バカがいないと、上映プログラム（選定される作品）は勢い集客力のみが基準となるだろう。しかも、映画バカと無縁の組織は経営が赤字に転ずれば、躊躇なく撤退するにちがいない。出資した自治体には負債だけが残る。

他県の事情調査

2008年5月から2009年3月にかけて、九州を中心に6つの地方都市に赴き、各地のミニシアター経営者などに面会して、聞き取り調査を行った。

その6個所は以下のとおりである。そして、そのうち5個所については、鹿児島コミュニティシネマ通信（月刊の内部報、以下「通信」と略す）に「訪問記」を書いたもので、それらも資料として末尾に添付する。

松山市（愛媛県）

2008年5月24～25日、学会出張を利用して、愛媛県唯一のアート系映画館「シネマルナティック」を訪問し、経営者兼支配人兼従業員である橋本達也氏と面談した。詳しくは末尾の資料1（通信第4号＝2008年6月号所収の記事）を参照。

宮崎市

2008年7月5～6日、宮崎映画祭（第14回）が開かれた宮崎キネマ館を訪れ、その運営を担当するNPO法人宮崎文化本舗の理事長兼事務局長、石田達也氏に会って、お話をうかがった。

長崎市

2008年7月25～26日、長崎に赴き、映画館「長崎セントラル」の館主、山崎泰蔵氏と面談。また、繁華街＝浜町で開かれる映画祭の企画集団「アートクェイク」代表者＝安元哲男氏からも詳しく話をきくことができた。詳しくは資料2（通信第6号＝2008年8月号所収の記事）を参照。

深谷市（埼玉県）

2009年2月16～17日、別の用事で上京したのを機に、埼玉県まで脚を伸ばす。映画館を利用したまちづくりで全国的に有名な深谷市と、その「深谷シネマ」を見るためである。映画館を運営するNPO法人「市民シアター・エフ」の代表者＝竹石研二氏も歓迎してくれた。詳しくは資料3（通信第13号＝2009年3月号所収の記事）を参照。

久留米市

2009年3月11～12日、NPOによる映画館経営に失敗した久留米市の事情を現地調査する。久留米大学経済学部文化経済学科の駄田井正教授に会い、その後、久留米日々新聞社、久留米のTMOに携わる株式会社ハイマート久留米を訪問する。そして、閉館した久留米スカラ座をかつて経営していたNPO法人カーテンコールの副代表＝小路賢司氏および映写技術担当＝福島英治氏に面談する。このお二人からは貴重な資料をお貸しいただいた。詳しくは資料4（通信第14号＝2009年4月号所収の記事）を参照。

佐賀市

2009年3月18～19日、衰退著しい佐賀市の中心商店街を活性化させるべく再開された映画館「シアター・シエマ」を訪問した。新しい経営者はまだ30代の若者である。その芳賀英行氏に会い、お話をうかがった。詳しくは資料5（通信第15号＝2009年5月号所収の記事）を参照。

【資料1】

他所の映画環境——松山編

松山市（愛媛県）は人口50万人で鹿児島市（60万人）より小さいのに、鹿児島市にないものを持っている。それはアート系の映画館だ。

シネマルナティック（以後CLと略す）は座席数160。けっこう大きい。1994年に正式オープンして以来、毎年120本以上の作品を上映し続けている。

なぜこういうアート系の映画館が、松山のような「田舎」で、持続的・安定的に経営できているのか？ 松山でCLの支配人、橋本達也さんにお会いし、直接お話をうかがった。

個人の努力とその限界

CLは橋本さんの「個人的映画館」と称される。じっさい、もぎりから映写、館内清掃までほとんど一人でやっている。しかも、それが年中休みなしなのだ。

橋本さんはCLの前身、シネリエンテで映写技師として働いていたところから、終映時以後、夜の映画館を「借りて」朝までフィルムマラソン形式での上映を重ねてきた（約70作品）。明け方、わずかな仮眠をとって、すぐに通常の仕事にもどった、という。

CLの前身の前身、フォーラム松山では、ロビーを映画ファンに開放し、映画評などを載せた情報誌を発行し、映画を語る夕べなどが開かれた。つまり、橋本さんは20年近く大忙しの状態のままなのである。

こうしてがんばっても映画館経営は苦しい。フォーラム松山もつぶれ、シネリエンテも閉館に追い込まれた。いまCLの経営も青息吐息。「映画ファン」の力強い支えがないからである。かつてのさまざまな企ても映画文化のサポーターをたくさんは育てなかった。

「私は大分の田井さんと違って、人を組織する力がありませんから」という。

鑑賞会員制度を作っても、会員はその場での楽しみや割引などの御利益を享受するのみで、他者の喜びに手を貸すようなことはしたがない。う～む、陰鬱なお言葉であった。

シネコンとの競合

CLのすぐ近くにシネコン（シネマサンシャイン、5スクリーン）があり、郊外にも同系列のシネコン（9スクリーン）がある。

CLにとって「問題」なのは、最近はシネコンでも単館系の映画を上映されること、そして夜9時以降のレイトショーが常態化していることである。いずれもCLの利点を損なわせる。

じっさい、この5月末、まちなかのシネコンで「迷子の警察音楽隊」（2007、イスラエル）、郊外のシネコンで「ゼア・ウィル・ビー・ブラッド」（2007、米）が上映されていた。

たしかに、「ふつう」の映画ファンにとっては、ときどきおしゃれな映画が観られたら、それで十分なのかもしれない。CLが提供する年間百本以上の作品は、いずれも佳作だとしても、人を引きつけず、地元のマスメディア（新聞・テレビ）が力強く宣伝してくれるわけでもない。

そういう作品が数多く上映されること、そのこと自体に文化的な意義がある、と考える

人が地元マスメディアの側にいないようだ。

街の沈滞と道連れ

さらに重大な問題は、CLを含む繁華街そのものが沈滞していることである。まちなかのシネコンも1階部分は空き家でスカスカだし、近隣にはシャッターを下ろした店舗が並ぶ。

CLとシネコンは、L字型のアーケードの角に位置する。アーケード街は鹿児島の天文館よりも長く、広くて立派である。ところが、市電やバスの停留所はいずれもL字型のアーケードの両端にあるため、角のところにある映画館にいたるには、どちらの停留所からも5～6百メートル歩かねばならない。

繁華街は駐輪禁止で、公営の駐輪場は夜の9時で閉門する。つまり、なるべく来るなどいうに等しい。

地元の国立大学（愛媛大）のキャンパスで、学生（3～4年生）4、5名に尋ねてみると、彼らはまちなかの映画館にはほとんど行かないようだ。郊外のシネコンには千台収納の無料駐車場があるから、映画に行く場合はもっぱらそちらだとか。そして、CLには行っていないという。うち2名はCLの存在さえ知らない。

学生に教えられる形で、ようやく気づいた。

映画館があれば街に人が来る、と期待するのは甘い。

アート系の映画館があれば街の文化的な価値も高まる、と期待するのも甘い。

建物があればどうにかなる、と思うのは、この分野でもまちがいのようだ。映画文化を楽しもうとする人々の数を増やすこと、それがまず大事なところである。映画館で映画を見る楽しみを教え、また、それを深く楽しむ「力」を育てなければならない。

むむ～、松山でとても大切なことを教えてもらったような気がする。

（鹿児島コミュニティシネマ通信・第4号＝2008年6月号所収）

【資料2】

長崎の映画祭はまた一味違う

長崎の繁華街＝浜町で開かれる映画祭も、今年〔2008年〕で5回目だそうだ（毎年9月中旬に開催）。この映画祭の特徴は、映画ファンが高じた企画集団「アートクェイク」を仲立ちにした商店街と映画館のコラボレート、という点である。つまり、みんなでおもしろく、みんながハッピーになる企て。

この7月末、アートクェイクの代表者＝安元哲男氏（60歳）、そして浜んまちの映画館（長崎セントラル）の主＝山崎泰蔵氏（73歳）と会って、お話をきくことができた。

まずは、長崎市の映画環境をざっと概観してから、お話の紹介に移る。

踏みとどまっている名画座

鹿児島の天文館と同様、かつては繁華街に数多く存在した映画館がづぎづぎと閉館した。8月末に長崎ステラ座が閉館すれば、映画会社の直営館は全滅し、残るは地元系の長崎セ

ントラル劇場のみとなる。じつは、このセントラルも2007年1月に1階部分を閉じ、テナントとして貸し出す。2階にある1スクリーン(128席)のみの小劇場として生き残った。(1階の家賃収入も大きな支え)

長崎セントラルは、ほとんどヤケクソのように、マイナーな映画、いわゆる単館系の作品ばかりを週に3本ずつ上映している。

ある長崎市民のブログによれば、このセントラルの存在こそが、長崎の良質の文化の証なんだそうだ。たしかに、この映画館も「まちの品格」を高める重要な要素のひとつになっている。

長崎には駅ビル(その名も長崎アミュプラザ)に、8スクリーンのシネコン(ユナイテッドシネマ)がある。そして、まもなくJRで一駅先(浦上駅の近く)にもうひとつ、9スクリーンのシネコン(TOHOシネマズ)がオープンする。鹿児島と違って、長崎ではTOHOシネマズの方に観覧車がついている。

楽観的な見方をすれば、シネコンは映画人口の増加につながる。だから、シネコンは悪者ではない。ま、これはある人がお役所(長崎県)に提出した文書の一節だから、たんなる作文かもしれない。しかし、やはり「世間的」にはシネコン+商業施設=高い集客力、の図式が信じられている。

シネコンの問題は、やがてシネコン同士のつぶしあいを引き起こす点にあるのではない。山崎氏(長崎セントラル)がいうように、シネコンは(いくらできても)市民の文化の向上につながらない。その点が街の文化の質、街の品格にかかわる大問題なのだ。

だからこそ、と山崎氏はいう。「私のようなキチ××が必要なんです。高卒後、伊万里の映画館で働きはじめ、それから55年間、ずっと低所得のまま、ただ映画が好きの一心で過ごしてきた。映画館経営でパソコンが必要になったときには、早朝、新聞配達のアルバイトをして金を稼ぎ、やっとパソコンを買った。ワープロが打てるようになったら、自分で個人誌『映画三昧』をつくり、コピーして配った。映画あつての人生、と思いこんでいる。そういうキチ××が映画環境の下支えをしなければ、映画文化の将来は危うい。また、街の文化も危うく、街の繁栄そのものも危うい。映画による集客(街の活性化)を期待する人や商店街があってもいいが、その論理だけだと街は大型商業施設+シネコンに負け、同時に街の文化が薄っぺらなものに変わるのを避けられない。だから、私は70歳を越えても、ここで足を踏ん張っているんです」

映画祭=起爆剤

2004年、第一回の浜んまち映画祭は、もう一人の映画好き(山崎氏の言葉をかりればキチ××)である安元哲男氏の呼びかけから始まった。

安元氏は、いわゆる団塊世代に属し、単純に言えば「おもしろがり屋」だ。停年に近づく、関連会社でおとなしく勤め続ける選択肢もあったが、それよりは、と起業の途を選んだ。30年つとめた会社を辞める。収入は激減しても「おもしろい方がよい」と決めた。

2003年に、デザイナーの知人らとともに企画集団「アートクェイク」を立ち上げる。文化芸術のイベントをとおして、まちづくりに寄与する、と謳う。長崎がもっとおもしろい街になれば、同世代(シニア層)の市民を楽しませ、元気づけ、彼らの底力を掘り起こし、また日本や世界の各地に散った同郷者のUターンにもつながって、さらに豊かな文化のま

ちをつくることができる。この好循環のとりあえずの起爆剤として、安元氏は映画に着目した。

2004年は、ちょうどフランソワ・トリュフォー没後20周年にあたり、記念のイベントをやりたいものだ、と安元氏は思い、たまたま山崎氏も同じ気持ちだと知る。

そこで安元氏は商店街に働きかけた。映画祭は商店街活性化の発火点になる、ともちかけたのである。それに対する商店街の反応に安元氏は逆に驚いた。すなわち、映画祭を後援する条件として、①映画祭は今後もずっと続けること、②良質の映画を選定して並べること、が求められた。

商店街は、集客力につながる特長をもったイベントを求め、文化的な味付けで他との差別化をはかろうとした。映画館（長崎セントラル）は、地元になくはならぬ存在であることをアピールし、集客力を高めて自己の存続を確かなものにしようとした。企画集団アートクェイクは、商店街と映画館のコラボレーションにより、まちの賑わいと文化芸術の定着が同時に得られることを期待した。

安元氏によれば、これまでのさまざまな文化芸術ジャンルの事業やイベントは、あまり熱のないお役所仕事か、もしくはボランティアな素人仕事で、いずれも単発的、断続的であった。成果の継承・発展が十分ではなかった。そうした欠陥を克服し、長崎の文化芸術の振興とまちづくりに寄与しうるものとして発案されたのが、アートクェイクによる仲立ちという仕組みである。

トリュフォー映画祭が、そのアートクェイクの最初の取り組みとなる。

映画祭としての「成長」

第1回の映画祭は8作品を約3週間かけて上映した。観客数は1800人で、黒字。これは同じくトリュフォー作品を並べた福岡での映画祭よりも上位の成績であったという。（ちなみに、観客数はその後も2000人弱で一定し、黒字も続く）

第2回からは、期間が2週間、作品数6本で定着する。

第3回からは、実施形態が実行委員会形式に変わる。すなわち、アートクェイク＋映画館＋商店街の三者が企画段階で融合した。

その積極的な効果は、つぎのようなイベントの多様化として現れる。

- キネマコンサート（名作映画音楽を地元ミュージシャンが、映画館やアーケードで演奏する）
- キネマ寸劇（二つの地元劇団がパフォーマンス）
- ストリートシネマ（アーケードにスクリーンを張って「座頭市」など上映）
- キネマカクテルバー（館内で、プロのバーテンダーがつくる）
- 映画祭グッズの製作販売（手ぬぐい、エコバッグ、ポストカード）
- 映画館探検（映写室を含め、ふだん入れないところもすべてをみせる）
- 映画祭ブックフェア（映画＋本で世界をもっと広げよう、と呼びかける）
- シティFMでの案内（2006年からMovies Junction という番組として定着。毎週金曜の夜放送。パーソナリティは安元氏）

一方で、やや否定的な効果もある。それは上映作品のラインナップが、だんだん雑多に

なっていることである。

第1回(2004)のテーマは「8本の恋の炎」で、トリュフォー作品が並び、体系性は当然確保された。

第2回(2005)は「フランスがいっぱい」。選定者＝安元氏がフランス映画を並べた。

第3回(2006)は「一人より二人で観たい映画」というテーマで、「ひまわり」「山猫」「ジャック・ドゥミの少年期」「幸福」「眺めのいい部屋」「女は女である」

第4回(2007)は「わたしの大事なもの」というテーマで、「ニュー・シネマ・パラダイス」「道」「はなればなれに」「若者のすべて」「マイ・ライフ・アズ・ア・ドッグ」「5時から7時までのクレオ」

そして今年、第5回にはテーマがない。作品は「あの胸にもういちど」「ざくろの色」「ぼくの伯父さんの休暇」「フレンチ・カンカン」「誓いの休暇」「春のソナタ」

(あ、話は逸れますが、今年オープンした長崎県立図書館の貸出DVDコーナーには「春のソナタ」などエリック・ロメールの作品が並んでました)

方向性のズレ

安元氏は映画祭の「成功」をバネにして、まちづくり支援の方向に活動をシフトさせている。

月刊のフリーペーパー『ハマスカ』をこの6月に創刊した。「浜町・ストリート・カルチャー」を縮めたものである。商店街と大学などを結びつけ、新しい長崎文化の発信拠点をつくらうという意気込みである。

長崎大学の学生などを励まして、コミュニティビジネスの立ち上げを促す。カステラをネクタイの柄にした特産品も、その流れでできた。自らも企業組合「eタウン」を立ち上げ、ITがらみのコミュニティビジネスを展開中だ。

他方、山崎氏(長崎セントラル)はひたすら映画にこだわる。

映画祭も、映画ファンを育てたいという気持ちで関わるが、実はファンを育てる妙薬はないともいう。

しかし、シニア層には映画ファンが潜在しているから、それを掘り起こすべし、と諭された。

かつては鹿児島にも枕崎にも国分にも鹿屋にも「キネ旬友の会」があったし、映画サークルがあった。そういう人々はいまでも映画を素材に語りたがってるはずだ。そういう人々に語り合いの場を提供すべきだ。個人宅でDVD上映会を開くのもよい。のべつ、そういう集まりをやっているならば、少なくとも年寄りの間では映画文化がふたたび花開く。それでいいんじゃないか。

と、話は鹿児島に飛び、鹿児島県の映画環境についても関心があることを示された。なんでも鹿屋の映画館(東宝国際)で2年ほど働いたこともあるんだとか。

この山崎氏と、アートケイクの安元氏は現在の立ち位置が微妙に異なっているけれども、お二人から鹿児島県の未来について多くのことを教えていただいた。

(鹿児島県コミュニティシネマ通信・第6号＝2008年8月号所収)

【資料3】

深谷シネマ訪問記

小さな町の小さな手作り映画館として、また、映画館を活用したまちづくりの成功例として、全国的に有名な「深谷シネマ——チネ・フェリーチェ」を訪ねた。

深谷シネマは、元さくら銀行の建物をそのまま利用し（ロビーがホール、金庫室が映写室になった）、1階の1スクリーンのみ、客席数50のミニ劇場である。料金は大人千円と安く、上映作品も小品・佳作・名作が並ぶ。これで経営が成り立っているのだから不思議だ。そのわけを知りたくて、この二月、所用で上京したついでに足を伸ばした。

深谷市は人口およそ15万人。埼玉県の最北部にあり、隣の群馬県名物のからっ風が県境を越えて吹きつける。JR深谷駅は恐ろしく立派な建物だが、駅前にはほとんど通行人の姿がない。月曜日の正午過ぎである。映画館を訪問する前に、町全体の様子をうかがいたくて、ホテルのフロントで「繁華街はどこですか？」と尋ねたら、郊外にあるイトーヨーカドーを教えてくれた。せっかくなので、そこにもいちおう行ってみた。駅前から30分おきに出る無料送迎バスに乗ると10分ほどで着く。やや小規模のショッピングモールであった。驚いたのは、このイトーヨーカドーの前に建っていた大きなパチンコ店がつぶれていたこと。鹿児島では考えられない。鹿児島では他の店はつぶれても、パチンコ店だけは元気に生き残るはずのものだからである。

まちなかの映画館

深谷シネマはJR深谷駅から400mほど北上し、中山道（旧道）と交わる十字路の近くにある。

その旧道に点在する味わい深い建造物（空襲を免れた商家）あれこれが、本来の「まちなか」はここぞ、と無言で訴える。じっさい、市と商工会議所がともに「まちの活性化」をうたうとき、この古い通りでの「にぎわい」復活を狙う。その起爆剤として選ばれたのが映画館であった。

2001年、深谷商工会議所の商店街活性化事業に竹石研二さん（NPO法人 市民シアター・エフ代表）が委員として加わり、「空き店舗を活用した映画館の運営」を提案して実現させた。

建物は市から借り、管轄は商工会議所で、運営はNPOが行う。つまり、市民と企業と行政がタッグを組む。この形が評価され、国と県から800万円の補助金が出た。これは全額、改装費に使われた。

映写機・スクリーン・音響機器・イスなどは全部中古品でまかなったというが、その費用の総額300万円は個人や商店からの寄付による。（う、うるわしい）

深谷シネマは、個人の熱い思いと、民間ならではの機動性と、行政機関の手堅いサポートを合体させて、2002年7月にオープンした。

映画は週替わりで1作品が、毎日4回、定時に上映される（10時半、13時半、16時半、19時半）。客数は1日平均80名、月間では2500名ぐらいだと聞く。超ミニの映画館であり

ながら、人件費なども含め採算がとれているというのもすばらしい。

いわゆる二番館である点も特徴だそうだ。シネコンでのロードショーが終わり、かつ、DVD化される前の作品を上映する。県北エリアで上映されなかった作品のなかから、アンケートなどを基に選択される。あまりマニアックにならないように配慮されている。

こうして、いまではヘビーユーザー（固定客）が4000人を超えるまでになった。人口が鹿児島市の4分の1ほどの町で、この数字だから驚く。

教えられたこと

NPO法人市民シアター・エフは2000年から約1年間、同じ旧中山道沿いで「フクノヤ劇場」という映画館を運営した。3階建てのフクノヤ洋品店が閉店したので、その2階の空きスペースを借り受け、前方に畳を敷き、後方にはパイプ椅子を置いて約60席の「仮設映画館」が作られた。

最初の上映作品は田中絹代主演の「愛染かつら」（1938年）。1週間で1150人が来場したという。映画を愛する高齢者が多いこと、しかもお年寄りたちは終映後も立ち去らず、お茶やお菓子が昔話に花を咲かせていたこと、この光景をみて竹石さんは膝を叩いた。

高齢者は映画を観たがっている、話したがっている、集まりたがっている、こうした要求に応えるのが町の映画館の重要な役割なのである。

フクノヤ劇場は、建物の老朽化と消防法の関係で閉鎖を余儀なくされた。そして1年半の雌伏のときを経て作られた現在の深谷シネマは当然その理念を発展させる。

チケット売り場はお客とスタッフが気軽に会話できる場になっている。スタッフ手作りの資料棚と作品解説の掲示などもほのぼのとしている。

この3月初めには「労働問題を考える映画週間」と銘打ち、昔の映画「蟹工船」と現代のドキュメンタリー「フツの仕事がしたい」が併映される。この2本を連続して観る人には軽食がサービスされる。これもスタッフの手作りである。

町に手作りの映画館をつくりたい、という竹石さんの夢が、いまやスタッフ全員によって共有され、それが人々の心を打つ。

鹿児島に戻って

2月26日、鹿児島市の中央公民館で「まちづくり」フォーラムが開かれ、We love天文館協議会の会長はシネコンの構想を語った。

フォーラムでの話によれば、天文館のシネコンは50以上のシミュレーションで《科学的に》検討して承認したプランだそうだし、20億円を超える建設費用を調達するための努力も相当なものらしい。もう後戻りはできまい。

私たちもその成功を祈るばかりである。

三つ目のシネコンができて、やはり私たちは独自に小さな映画館をつくるしかないことがわかった。深谷市と違って、鹿児島では市も商工会議所もシネコン計画にしっかり絡んでいるみたいだから。

フォーラムでは、藻谷浩介氏（日本政策投資銀行）による基調講演も参考になった。氏はいう。

「同じ品揃えの大型店ばかり増やしても、まち全体の売り上げ増にはつながらぬ」

「高齢者の貯蓄を消費にまわす需要創造こそが肝要」
「ユニークなものを売る小さな店のある路地裏ネットワークを増やそう」
「内需回復は遅れているのではなく、高齢者に売れる種類の商品は今でも十分に売れている」

おお、これは深谷シネマの竹石さんが語ってくれたことを、別の言葉で表現したもののように入る。

ますます勇を鼓してミニシアターづくりに励むべし、との天啓を受けた気分。まことにめでたい。

（鹿児島コミュニティシネマ通信・第13号＝2009年3月号所収）

【資料4】

久留米の失敗に学ぶ

まちの映画館づくりで成功例が深谷シネマ（埼玉県）なら、失敗例には久留米スカラ座（福岡県）を挙げてもよからう。

久留米はどのように、また、どうして失敗したのか？

それについて少し考えてみたい。

映画館が消えたまち

久留米市（人口24万人）のまちなかにあった映画館も閉館があいつぎ、2004年12月末、郊外にシネコンができると、最後の1館も経営困難となる。

その久留米スカラ座の支配人、福成浩幸さんは生き残りをかけて「単館系・アート系」への変身を企てた。シネコンとの差別化をめざしたのである。2006年4月からロードショー作品の上映をやめ、5月には入場料一律500円のワンコイン興業を始める。

その努力もむなしく、2ヶ月後、けっきょく「一時休館」。こうして、2006年7月から中心市街地には映画館がなくなった。（ポルノ映画館を除く）

一方、久留米市にも映画を自主上映する団体があった。「カルキヤッチくるめ」（1992年に創設、正式名称＝「久留米市ふるさと文化創生市民協会」）は、あの「ふるさと創生1億円」で作られた組織である。まちなかの「六角堂広場」にりっぱなオフィスをもち、事務局員3名、イベントのコーディネーター100名を擁した。同じ広場内にあるTMO＝株式会社ハイマート久留米（1993年創設）とも連携し、映画の上映会を含む、さまざまなイベントを企画・運営してきた。

2006年、久留米にちょっとした映画ブームが起こる。久留米を舞台にした映画「Watch with Me 卒業写真」の撮影開始がきっかけである。市長を顧問とする「支援する会」が市役所内で発足式を催す。久留米大学では、「地方発の映画」というテーマでシンポジウムが開かれた。パネリストの掛尾良夫さん（キネマ旬報映画総合研究所所長）は、深谷シネマの「成功」を紹介した。

スカラ座の支配人、福成さんもこの小ブームに乗じて、映画館の再開を企てる。「カルキヤッチくるめ」のチーフコーディネーター、金子盛司さんたちがその呼びかけに応える。

この年、2006年12月に、NPO法人「カーテンコール」設立の準備が始まる。しかし、NPOの認定を得ぬまま、映画館は翌年3月、「見切り発車」的に再開された。(認定は8月に得られた)

スカラ座の再開

このあわただしさは、映画館の持ち主にオープンをせかされたかららしい。いま借りてくれるなら、1フロア月額10万円、2フロアあわせて20万円でよい、という条件。客席数はいずれも約250なので、その広さからすれば、破格の安さだ。しかも、映写機、スクリーン、スピーカー、そして座席がすでに設置済みなのである。

皮算用で、1日60人の観客が入れば、入場料千円としても6万円。月に180万円。光熱費はもちろん、常勤3人とパート数人分の賃金もこれでまかなえる。

この計算をたてた人たちの念頭にあったのは、深谷シネマのケースである。あの小さなまちでさえ、月に3千人近い観客が来る。深谷で実現したことが久留米で実現しないはずがない。入場料千円という安めの料金設定も深谷シネマをまねた。

オープン直前、2007年2月に金子盛司さんがまとめた事業計画書は、おい、大丈夫かといいたくなるほど明るいトーンに満ちている。

「久留米未公開の日本映画の名作公開を幹に、長年培った作品への洞察力と、観客の時代に応じたニーズを把握した上映作品を選定する。いい作品を上映すれば人は振り向いてくれる。人は街の中に還ってくる。それに伴い、旧作の掘り起こしを通して地域における映像文化の構築を目指す」

事業・環境分析(いわゆるSWOT分析)もなされているが、その内容も今にして思えば楽観的にすぎる。

S(自分の強み)は「映画への情熱・経験」であり、「まわりの方々の応援がある」こと。また、O(事業上の機会)は「街中の映画館の要望が多い」こと、「高齢者のニーズに対応できる」ことである。

事業の2W1Hの記述も楽しい。

「誰に売めるのか」＝「車社会から離れつつある人、地球環境問題に関心の高い人、車という足を持たない人」

「何を売めるのか」＝「シネコンが取りこぼした、小品ながら観た人の満足度の高い作品」

「どのように売めるのか」＝「料金を千円とし、割安感を強調する。会員特典(詳細は検討中)実施。昭和黒白映画、時代劇、西部劇などシリーズ企画。講演やライブなどのホールとしての企画営業」

客が来ない

オープニング上映作品は「フラガール」と「ゆれる」。『キネマ旬報』で2006年度1位と2位だった作品である。

しかし、あてにしていた「Watch with Me 卒業写真」の、ご当地久留米での先行公開はTジョイにとられてしまった。これがケチのつきはじめ。

オープンして1～2ヶ月、春先には1日40人ほどだった客数もやがて20人前後に減少し、電気代(月20万円)も払えなくなる。

もちろん、客を呼ぶ(あるいは掘り起こす)努力はなされた。7月には、「しゃべれども

しゃべれども」の上映にあわせて「久留米落語長屋」と題する7日連続の寄席が開かれた。初日は満席となった。地元バンドの演奏会も開いた。10月には「スローフード・シンポジウム」を開き、王理恵さんを招いてトークセッションを行った。12月には、「銀幕のスターたち」と題し、久留米出身の田中麗奈を呼んで、初主演作「がんばっていきまっしょい」（1998年）を上映した。

しかし、再開してちょうど1年、2008年3月、とうとう営業は続行不能となり久留米スカラ座は店を閉じる。NPOとしての「ありがたみ」を享受することもないまま、じり貧の形で終焉を迎えた。

何のためのNPO？

持続的な経営のためにはNPO化が不可欠——これはあの深谷シネマの竹石さんが力説する点である。久留米の金子さんはそれに習ったともいえる。

法人化の理由について、金子さんはこう語っている。

「興行収益のみに捉われた映画やDVD等が普及する昨今、当団体の『心に残る映画』の上映活動で、多くの人達に映画文化の良さを伝え、さらに、地域の活性化を図るには活動の継続が重要なことなのです。その為にも、多少の時間や手間がかかっても法人化すべきだと考えました。法人化することで信頼性が増し、多くの助成金、補助金制度への申請が可能になり、活動の維持に繋がるからです」（久留米市の公式ホームページに掲載）

これを読む限り、話の要点は助成金の獲得だ。たしかに、お金はほしい。法人化→信頼性増加→助成金ゲットという流れを期待する気持ちも理解できる。しかし、助成金に目がくらむと、二つの問題が見えにくくなってしまいそうだ。

まず、法人化に伴う事務処理・財務処理の煩雑化。その苦労は、法人化の御利益に見合うかどうか。法人化は、組織の目的実現に役立つというより、むしろ逆に、法人維持のための作業負担を強いるかもしれない。本末転倒の事態が生じかねない。

もう一つは、まわりからさまざまな支えを得ることの必要性。深谷の竹石さんによれば、NPO化の一番のありがたみは、行政や商工会議所（地元企業や商店）との連携が深まること、地域からの力強い支えが得られやすくなることにある。助成金はむしろおまけと考える方が健全だ。

久留米の場合、法人としての経営が半年しか持たず、NPO化のために支払った労力がむなしかつたばかりでなく、認定された時期（タイミング）が悪く、何の助成金・補助金も得られなかった。つまり、二重に悲劇的だった。

敗因

わかりやすい部分のみを列挙すれば

1) 器が大きすぎた

俗に「貧乏人が馬を貰った騒ぎ」という言葉がある。良いものを手に入れても、こちらに力量がないと、うまく使いこなせず、持てあます。まさにこれである。

250席が2フロア、これをほとんど改装せずに使ったので、アート系、単館系としての再出発を上手に印象づけられなかった。やはりミニシアターにはそれにふさわしい、適正な大きさがあるらしい。

大きすぎると、ムダに空気を暖めたり冷やしたりしなければならず、その電気代もバカにならない。

2) バカさ加減の不足

「破格の条件」に飛びつき、「走りながら考えよう」と決めての出発だった。しかし、客は増えるどころは、むしろ減る一方。

計算も甘かったが、それよりも「客が来なくても続ける」だけの余裕がなかった。金銭的にも精神的にも。

とにかく映画館には客は来ないものと観念すべきである。これはミニシアターでもシネコンでも同様である。持ち出し覚悟の出発でなければならない。つまり、映画館経営はバカでなきゃできない。

3) 支援なし

TMOの関係者が感じた印象によれば、「金子さんたちは勝手に走り去った」。相談があれば支援のしようもあったのに、という。その言葉は本当かどうかわからないが、まわりの支えがなかったのは確かなようだ。

商店街のなかにながら商店主たちからもアテにされない。これも再開を急ぎすぎた弊害のひとつか？

自主上映団体の時代の財産も活かされない。ひとつの運動体であれば、人的な支え（活動力の提供など）はその後も期待されるはずであった。ところが、じっさいには中核の数名のみが死ぬほど働いて力尽きた。

【謝辞】

NPO法人カーテンコールについては、副代表の小路賢司さんと映写技術担当の福島英治さんから数々の貴重な資料を見せていただいた。記して感謝する。

(鹿児島コミュニティシネマ通信・第14号＝2009年4月号所収)

【資料5】

佐賀はまた別の道

人口23万人の佐賀市にも小さな映画館がある。そのおかげで、九州・沖縄の県庁所在地にミニシアターがないのは鹿児島市だけという「不名誉」ぶりがいっそう際だつことになる。

名はシエマ CiEMA

佐賀の映画館「シアター・シエマ」は、小さいといっても80席+125席の2スクリーン。りっぱなものである。

2006年に閉館した佐賀セントラルを改装し、3スクリーンの一つを減らし、その空間をカフェ（無料休憩も可）に変えた。なかなかおしゃれな造りになっている。(2007年12月にオープン)

シエマとは、シエロ（スペイン語で空の意）とシネマを合成したものだそうだ。こちら

へんはややおしゃれ臭が気になるころだが、それはまあ、あちらの勝手である。

場所は昔の繁華街の一角。ただしJR佐賀駅から歩けば、けっこう遠い。鹿児島中央駅と天文館の関係と同様、JRの駅と繁華街はほとんどつながりを持たない。そうした通例を忘れたわけではないが、初めての街は歩いてみるにかぎる。街の「すたれ具合」を確かめながら歩いた。

昔の繁華街、呉服町は、久留米市（人口は佐賀と同程度）の六ツ門商店街よりも「さびれ方」が進んでいた。老朽化したアーケードは、修理もできず、この5月から撤去作業が始まるという。その商店街の協同組合は、立体駐車場建設のさいの借金（全16億円で、県からの融資4億円のうち3億8千万円）を返済できず、昨夏、とうとう自己破産を申請したのだ。（鹿児島市の天文館シネコン計画の先行きを暗示するような話ではある）

たしかに見た目には、いかにも元気なさげな商店街であったが、どん底ゆえの開き直りがあちこちで感知できた。たとえば、3月末の「さよならアーケード」イベントでは、4千個のキャンドルが点された。ひなまつりでは、各商店の店先に各家所有の「おひなさま」が飾られた。とにかく、安上がりでできることは何でもやろうという構え。

それは街づくりのために、ヨソモノ・ワカモノ・バカモノを「本気で」利用しようとすることにもつながる。この3「モノ」が市街地活性化のカギであることは、かなり前から日本全国どの地域でも「常識」として語られてきたことであるが、それを「本気」にして受けとめたケースは稀である。

シアター・シエマは、実にその3「モノ」が一体となって実現した。

69'ers FILM

シックスティナインではなく、シックスナイナーズと読むらしい。西日本各地のカフェやギャラリーなどに出向いて上映する「移動式映画館」を運営する会社で、拠点は福岡市にある（この4月18日、鹿児島の小さな絵本美術館アルモニで「幻の活動大写真」を上映したのもこの会社）。その代表、芳賀英行さん（30代半ば）が自ら佐賀に乗り込み、シアター・シエマを開き、そこに経営者として常駐している。

支配人の重松恵梨子さんは20代半ばだから、やっぱりめっちゃくちゃ若い。東京の阿佐ヶ谷から越してきた立派なヨソモノである。（しかし、昨年4月から朝日新聞の佐賀地方版に「シネパラダイス」という随筆を、すでに1年以上、毎週連載し続けており、いまでは立派な「地方文化人」）

男性スタッフ2名も福岡からの転入者ゆえ、まるごとヨソモノ集団だといえる。

芳賀さんは、田井肇さん（大分のシネマ5支配人で、ミニシアター全国連盟＝シネマシンジケートの副代表）を介して佐賀の自主上映活動グループ「街なかキネマさが」と出会った。「街なかキネマさが」の面々は閉館した「佐賀セントラル」再開を願望しながらも、経費や常駐スタッフの問題で足を前に踏み出せない。そこで、芳賀さんは福岡県人らしく（あ、筆者もそうなんです）つい手を挙げてしまった。本人は「おとこ気」を出したつもりだろうが、つまりはバカモノである。

そうと決めたら、もう、自分の好きなようにやる。フツウの映画館ではなく、プラスαの開放的な空間をつくりたい。人が集まり、人が交流する、そのネットワークの核になりたい……。

そもそも芳賀さんは学生時代から映研とかとは無縁の人だった。つまり、マニアックでマイナー志向の、映画一筋の人ではなかった。ただインディーズ系の映画のおもしろさに気づき、そして、その観客の少なさに「もったいなさ」を感じ、いろんな人に観てもらおう環境づくりができれば、世の中はそのぶんだけ楽しくなるかも、と考えた。

その考えの下、シエマはコミュニティスペースという性格づけがなされる。広いロビーはカフェとして使われ、絵本や小物類の売り場ともなり、コンサートも開かれ、また絵本の読み聞かせも催される。

もちろん映画は、支配人の重松さんが厳選した「非売れ筋」の作品が上映される。

TMO佐賀（佐賀商工会議所）の伊豆哲也さん（タウンマネージャー）は、このシエマのコンセプトにじびれた。金は出せないが、深く心を寄せる。自分のブログで「ヨソモノの心意気に乗っかりましょうよ」と呼びかける。

確執？

芳賀さんは2007年夏の全国コミュニティシネマの集会で、これから活躍する人として紹介された（私も会場で拍手した一人）。

しかし、この全国組織の代表的な方々＝堀越謙三さんや田井肇さん（それぞれ、シネマ・シンジケートの代表と副代表）とはミニシアターづくりのコンセプトが異なった。シアター・シエマの形ができあがると、芳賀さんはこうした方々から映画に対する「純粹さ」が足りない不届き者と見なされた。カフェの（つまり、遊びの）比重が大きすぎるのだ。カフェの端にDJブースがあったりするのを見とがめられ、難詰された（ような気がしたらしい）。

一方、芳賀さんにとって、居心地のいいカフェはきわめて重要な要素であった。芳賀さんは朝日新聞の記者にこう語っている。「業界から見れば、作品の内容でなくカフェで勝負する映画館は邪道でしょう。でも、スクリーンもカフェも含めたサロンのような“空間”として発信したい」（2008年12月8日付）。質も高く趣味の良いイスやテーブルを備え、そこに居るだけで豊かな気分になれるような空間作りが目指された。映画鑑賞後の語らいの場にもしたかった。他人が語る「うんちく」に耳を傾げるだけでも「勉強」になるかもしれない。

こうして映画館の「方向性」の面でズレを感じた芳賀さんは、田井さんたちが呼びかけた九州内のシンジケートに参加しなかった。組織の論理、運動の論理みたいなものを感じ、怪しんだからだ。

すると、おもしろい現象が発生する。

自主上映活動グループ「街なかキネマさが」を構成した1集団「チネチッタ」は、シエマ開館後も定期的に自主上映会を催し続けるのである。これは純粹に映画だけを楽しもうとする対抗勢力のように見える。じっさいには、確執などないかもしれないが、一見、ヨソモノの若造に対して地元の古参が「本当の映画好き」の真骨頂を見せつけている形だ。（ただし、「街なかキネマさが」の代表だった大歯雄司さんは静観の構え）

シネコンとの共存

チネチッタは20年前から毎月のように自主上映会を開いてきたのを誇りとする。その主

宰者、中溝好生さん（1946年生）は若造（芳賀さん）が生まれた年に佐賀で映画サークルを立ち上げた人。その後、古湯映画祭（今年で26回目）の立ち上げにも関わった。中溝さんはシエマに敵対的でもないが、シエマができて安心立命したわけでもない。

このチネチッタの活動も、われわれ鹿児島の人間には参考になる。

自主上映会を郊外のシネコン（イオンシネマ）の1スクリーンを借りて行っているのがある。月に1日だけ借りるなんてこともできるらしい。

おもしろいのは作品のラインナップだ。シエマで上映してもおかしくない作品が並ぶ。2008年の10本を列挙しよう。

1月：腑抜けども悲しみの愛を見せろ

2月：ある愛の風景

3月：この道は母へと続く

5月：君のためなら千回でも

6月：実録・連合赤軍

7月：光州5.18

9月：アウェイ・フロム・ハー

10月：つぐない

11月：言えない秘密

12月：12人の怒れる男

これを眺めると、ただただ自主上映会を続けたい一心、映画愛の一徹ぶりがうかがえ、頭が下がる。

結語

佐賀のような小都市、しかも福岡へ映画を観に行くのも容易な街ですら、このように複雑で怪しい動きがある。

鹿児島よ、このままでいいのか？

（鹿児島コミュニティシネマ通信・第15号＝2009年5月号所収）